

筒井康隆 「最後の喫煙者」と嫌煙権運動

吉澤 優

はじめに

筒井康隆の「最後の喫煙者」は一九八七年十月に『小説新潮』で初出が発表され、一九九〇年四月に刊行された『夜のコント・冬のコント』(新潮社)に初刊が掲載されている。一九九五年一月四日には、短篇ドラマ集『世にも奇妙な物語』に収録され、ドラマ化して放送された。

本作のあらすじは次のようなものである。

日本では、ほんの十五、六年前に始まった禁煙運動であったが、六、七年前あたりから喫煙者への弾圧が猛烈になりはじめた。ある程度の名の売れた小説家の「おれ」の家に、ある日、ヤング雑誌の編集者二名が原稿依頼にやってきた。一人は女性であり、「おれ」に名刺を渡すのだが、その右肩には大きくこう印刷されていた。

わたしはタバコの煙を好みません

チェーン・スモーカーであった「おれ」は、この名刺に激怒し、編集者たちを追いつ返したが、女性編集者が嫌煙権運動の一方の旗頭であったために、自誌他誌を問わずに「おれ」や喫煙者全般の悪口を書き散らした。これに反論したかった「おれ」は、毎号コラムを

書いている「真相の噂」という雑誌の編集長に焚きつけられて、同誌で嫌煙権運動に対する抗議の文を発表した。一文が発表されるやいなや、「おれ」は反論の嵐や厭がらせに見舞われるようになった。その後も、喫煙者に対する風当たりは強くなる一方で、ついに喫煙者に対して暴行や殺人が行われるようになったり、嫌煙権^{K・E・K}と称して、残り少ない煙草屋に放火する連中がでてきたりもした。煙草を喫い続けている有名人としてしばしば記事に取り上げられていた「おれ」は、喫煙者差別の標的となった。ある夜、同じ喫煙者仲間の目下部さんがK・E・K団の襲撃にあい、「おれ」の家に逃げ込んできた。「おれ」と目下部さんはK・E・K団の襲撃に対抗しながらも命からがらに逃げ切ることができた。その後も、ほかの喫煙者たちと一緒にたて喫煙者狩りに抵抗していたが、ついに喫煙者は「おれ」と目下部さんのふたりになり、国会議事堂の天辺にまで追いつめられてしまう。「おれ」と話し合っていた目下部さんは、ヘリコプターから発射された催涙弾を頭部に直撃されたことにより、落ちてしまう。ひとりで抵抗を続ける「おれ」は、ヘリコプターから発せられる「貴重な喫煙時代の遺物であり、天然記念物であり、人間国宝である彼を保護されなければならない」という旨のアナウンスを

聞く。「おれ」は、保護された鳥獣の末路が悲惨なものであることを知っていたために、いやがって地上へとびおりようとするが、すでに遅く、網を広げた二機のヘリコプターが「おれ」に向かって近づいていた。

筒井は嫌煙権運動に反対する旨のコラムを本作発表前後で多く発表しているが、『最後の喫煙者』を書いた後では、本作について次のように述べている。

この欄へ嫌煙権運動や喫煙者差別のひどさについて書いたのがもう三年前になる。以後、この傾向はついに無分別な反喫煙運動にまで高まって、反対する団体がないのをよいことに一方的に盛り上がり、非常識さとヒステリー性に歯どめがなくなってしまった。喫煙者の方にはストレスがなく、情緒的に安定しているからおとなしい。煙草というのは人間を情緒的にする偉大な発見であった。だが、それをよいことにして喫煙者いじめがどんどん進行すれば世の中はどうなるのか。

と、いう話を書いた。「小説新潮」昨年十月号の『最後の喫煙者』である。オーウェル「一九八四年」の煙草版として、暗黒の恐怖時代を書いたのだが、リアリティがあったらしく、おれの担当の若手編集者がこれを読んでふるえあがり、煙草をやめてしまったのには驚いた。喫煙者を擁護した筈だったのだが、逆効果になってしまったらしい。――

その後わしは「最後の喫煙者」という短篇を書いた。喫煙者差別が極限に達した暗黒の恐怖時代を描いたもので、いわばオーウェル「一九八四年」の煙草版である。リアリティがあったらしく、これを読んだ担当編集者が顫えあがって煙草をやめてしまったのには驚いたものだ。この作品は評判になり、林隆三主演でテレビ・ドラマ化もされた。最近昔の短篇が再編集され、短篇集として文庫版数冊が一举に発売されたのだが、他の文庫が初版とまりだったのにこの「最後の喫煙者」をタイトルにした短篇集だけはなんと発売後二カ月で五版に達し、現在は六版となった。喫煙者差別の風潮を憂慮し、行く末を心配している人がいかに多いかを示す現象であつたと思つている。二

最近、ツイッターで読者の話題になつてゐる僕の小説が『最後の喫煙者』と『急流』（時間の流れが徐々に速くなつていく物語）そして『アフリカの爆弾』という、未開の村が核ミサイルを保有する話。まあ、時節柄でしょう（笑）。『最後の喫煙者』は、SFでしかあんな無茶苦茶な世界は書けないと思つていたけれど、ほとんど現実になつています。執筆中は本当に、こんなことになるとは思わなかつた。三

いずれは『最後の喫煙者』（新潮文庫）と同じような状況になるでしょう（喫煙者差別が魔女狩りのレベルに達し、殺人・私刑・放火・脅迫がおこなわれる）。またそこまではいっていないけれど、

いずれそうなる。 四

筒井が一九八七年当時には虚構の世界としてしか描いていなかった本作だが、現実世界の近年の日本の喫煙環境の厳しさは、喫煙者個人に対しての直接的な暴力は抜きにしても、作中と同等かそれ以上のものになりつつある。筒井自身もそのことについて驚嘆しながらも、本作と同じ末路を迎えることを推測している。

また、喫煙をたしなめる風潮は実際の喫煙だけでなく、煙草の広告、喫煙しているシーンのある漫画や映像作品にまで多く及ぶようになったが、活字で喫煙の描写することも最近では、はばかれています。『週刊文春』で、現在の日本たばこ産業株式会社（JTI）の前身である日本専売公社の提供によって、一九六五年十二月六日号から連載開始された「喫煙室」というタイトルのコラムがある。井伏鱒二、永井龍男、吉田健一といった小説家をはじめとして、様々な分野で活躍する文化人、芸能人、著名人が数多く執筆しており、煙草だけに限らず、個々の執筆者にとつての嗜好品や娯楽についてのことだからこそ書かれている。一九六五年十二月六日号以来五三年間、『週刊文春』誌上で最も長い連載企画とされた同コラムだが、二〇一八年十二月二十七日号をもって幕を下ろし、二〇一九年一月から「たがいのみらい」にタイトルを変更することになっている。また、同じく日本たばこ産業の提供によって、二〇〇三年六月十二日号から連載を続けてきた『週刊新潮』の「あ、ちよっと一服いいですか？」というコラムも「そういえば、さあ」というタイトルに変

更する。年々低下する喫煙率や受動喫煙の問題が相まって、喫煙場所の規制や煙草の値上げなど、喫煙に関する世間の風潮は厳しいものになっているが、このことがタイトル変更の要因の一つになっていると考えられる。

「最後の喫煙者」の初出が掲載された『小説新潮』の目次の本作のあおり文には「一九八七年にはすでに前兆があり、遂にここから来た……煙草呑みへ愛を込めて！」と書かれて、描かれた虚構が現実のものになりつつある「最後の喫煙者」だが、筒井康隆は本作執筆当時、どのように嫌煙権運動を捉えて、批判していたのだろうか。第一章では、まず作中の煙草に関する以外のパロディの詳細を調査することで、小説という虚構を現実といたにしてリンクさせていたのかを調べる。第二章では、現実の嫌煙権運動の様相をどのようにパロディとして変換させて、本作に反映していたのかを考察する。第三章では、作中の喫煙、嫌煙権運動などの描写を筒井康隆が煙草に関して語っているコラムに対応させて整理し、筒井の煙草に関する持論を読み解く。

一 煙草に関する以外のパロディについて

本作は、良識の範囲を超えた嫌煙権運動が盛んに行われ、常態化された異様な世界を描いたものだが、その世界は完全な虚構、ただで成り立っているわけではない。初出が発表された一九八七年に至るまでの社会情勢や時事問題、現実存在するものの固有名詞、筒井

康隆自身の身辺など、煙草関連以外の事象もパロディとして取り入れている。筒井は、そうした書き方によって現実世界そのものをパロディとして描くことを強調していると考えられる。本章では、そのようなパロディのモデルとなった事柄について調査する。

本作の主人公の男である「おれ」は自分のことを「ある程度名の売れた小説家」と自己評価し、その際の自己紹介において「地方都市に住んでいた」と述べているが、この地方都市とは、筒井康隆の住居がある神戸市垂水区をモデルにしている。八橋^{一五}一郎は、筒井は一九七二年四月に東京から神戸に転居しており、「神戸の住居は垂水区瑞ヶ丘八―四にある。国鉄垂水駅東口から徒歩で七、八分の距離であった。垂水銀座を通り抜けて坂をのぼり、くねくねと折れ曲って歩く。石垣の上に建った、落ちついた地味な家である」と述べている。ヤング雑誌の編集者二名が原稿依頼に「東京から四時間しかかかってやってきた」と作中ではされているが、東京駅から垂水駅までかかる時間は、当時の時刻表^六によれば、東京駅を六時〇分に東海道・山陽新幹線、ひかりで出発した場合、新大阪駅に八時五六分到着、新大阪駅を九時六分に東海道本線・山陽本線、普通列車で出発し、垂水駅に十時七分に到着することができる。この場合、かかった時間は四時間七分である。新大阪駅ではなく、西明石駅まで新幹線で向かった場合は、東京駅を六時十二分に東海道・山陽新幹線、ひかりで出発し、西明石駅に九時四五分到着、西明石駅を九時五八分に山陽本線、普通列車で出発し、垂水駅に十時八分に到着することができる。この場合は三時間五六分かかる。いずれの経路も四時

間といって差し支えない時間であり、やはり作中の地方都市は、神戸市垂水区がモデルになっている。

作中に登場する「おれ」の妻や息子については、妻は一九六五年に結婚した筒井の妻、光子、息子は長男、伸輔をモデルにしている。伸輔は一九六八年八月に誕生し、本作が掲載された一九八七年一〇月頃には一九歳であるため、「おれの車は最近息子の専用車にされてしまっていた」という描写は辻褄が合う。「おれ」の家への喫煙者差別による厭がらせや脅迫が増えたことで、「もう一緒に住めない」というので、妻は息子をつれて実家へ帰ってしまった」という場面があるが、妻、光子の実家は神戸市垂水区にある^七。

過激さが増し、ついに殺人にまで及んだ喫煙者差別の荒唐無稽さを表す場面の一つとして「東京地方に震度五の地震があつて住宅密集地域が火事になった時には、喫煙者どもが暴動を起したというデマがとび、道路に検問所が設けられ、都都逸が歌えぬ避難者はすべて喫煙者と看做され、処刑された」という一文があるが、これは、一九二三年に起こった関東大震災における朝鮮人虐殺事件をもとにしていると思われる。また、「都都逸が歌えぬ避難者はすべて喫煙者と看做され、処刑された」の箇所は『大正むさしあぶみ―大震災印象記^八』の次の文章がモデルになっている。

静岡辺の自警團は怪しと見れば「君が代」をうたはし、私の近所は都都逸をうたはした。

ふてい鮮人が居ました！都々逸をうたへといつたら、日本ので

すかつてぬかしやあがつた……

あるものが私に云った。落語気分は、かうした中にも到る処にたゞよつて居る。

作中の「おれ」をはじめとする喫煙者の同志たちのもとに、煙草のパッケージをモデルにした動物たちが助っ人にきたが頼りにならなかった、という場面の次には「最後には「スモカ歯磨」から派遣されたという真つ白な歯をしたスーパーマン的お兄さんが助っ人によつてきてくれて」とあるが、スモカ歯磨は一九二五年に「タバコのみ歯磨スモカ丸」として発売された歯磨き粉であり、スーパーマンとの関連はない。スーパーマンと関連がある歯磨き粉としては、「スーパーライオン」が挙げられる。ライオン歯科衛生研究所のホームページ¹⁰では、『全怪獣怪人《上巻》二』によれば日本でのテレビ放送が一九五六年から始まったとされる「スーパーマン」の、スーパーマンの絵を使用したスーパーライオンの宣伝ポスターが掲載されており、次のように述べられている。

日本でテレビ放映が始まったのは1956(昭和30)年のこと。ライオンは、いち早くテレビの可能性に着目し、この年に日本テレビ放送網で「動物ビックリ箱」の提供を開始しました。この番組は、動物の生態をわかりやすく、面白く紹介するもので、子どもやお母さんに歯みがきの大切さを伝えるにはぴったりでした。その後も積極的な番組提供が続きます。中でも東京放送の連続テ

レビ映画『スーパーマン』は、視聴率が30%を超えるほどの大人気。この人気にあやかって、ライオンは歯みがき剤「スーパーライオン」を発売しました。

本作の終盤で、「おれ」は国会議事堂の天辺に追いつめられ、目下部さんが墜落してしまつたことで喫煙者の最後の一人となつてしまふが、しばらくして頭上のヘリコプターからのアナウンスを聞く。次の文章は、その場面から本作の終わりにかけてのものである。

「……と、なるであります。その時に後悔しても追いつきません。これは重大な損失となります。今や彼は貴重な、喫煙時代の遺物なのであります。天然記念物であり、人間国宝ともなり得ましょう。保護してやらねばなりません。皆さん。ご協力をお願いします。くり返します。こちらは本日、緊急に発足いたしました喫煙者保護協会であります」

おれはふるえあがつた。いやだ。保護されてたまるものか。新しいいじめが始まろうとしているのだ。保護されはじめた鳥獣は必ず絶滅するものと相場がきまつている。見世物にされ、写真を撮られ、注射を打たれ、隔離され、精液を採集され、その他からだ中のあちこちをいじりまわされたあぐく痩せおとろえて死なねばならぬ。それだけではない。死ねば剥製にされてさらしものだ。そんな死にかたをさせられてなるものか。おれはあわてて地上へとびおりようとした。

だが、すでに遅かった。地上には救助幕がはりめぐらされていたのだ。

彼方の上空から、網をひろげた二機のヘリコプターがゆっくりと降下し、近づいてくる。

ここで書かれている鳥獣としては、トキが連想される。一九九五年一月四日に放送された『世にも奇妙な物語』のドラマ版「最後の喫煙者」では、主人公の作家がK・E・K団に追い詰められたときに聞こえてきたヘリコプターのアナウンスにおいて「皆さん。今やその男は絶滅寸前のトキに優るとも劣らない、喫煙時代の遺物であり、天然記念物であり、はたまた世界遺産ともなり得ましょう。こちらは本日、緊急に発足しました環境庁喫煙者保護課です」と発言し、明確に「おれ」を「トキ」と並べて語っている。

トキは、田畑を荒らす害獣であったが、乱獲が一つの原因となつて絶滅寸前に追いやられており、この点が作中における最後の喫煙者となった「おれ」に類似する。

一九二七年に佐渡支庁がトキ発見の懸賞を呼びかけるなど、昭和初期ごろから日本ではトキの保護の動きが見られ、一九三四年に天然記念物に指定、一九五二年に特別記念物に指定されている^{二〇}。一九六五年には「カズ」「フク」といったトキの幼鳥が発見され、保護されるが、「カズ」は一九六六年、「フク」は一九六八年に死んだ。一九六七年には、ひなの「フミ」「ヒロ」、次いで「キン」が保護されたが、「フミ」「ヒロ」の二羽は一九六八年、「キン」は二〇〇三年

に死し、これが日本産最後のトキの死となった^{二一}。一九七〇年には「ノリ」が保護されるが、翌年に死んだ。一九八一年には、「ギイロ」「アカ」「シロ」「アオ」「ミドリ」の五羽が保護されるが、同年に「ギイロ」「アカ」、一九八三年に「シロ」、一九八六年に「アオ」が死し、一九九五年には「ミドリ」が死んだ。一九八七年までに日本で捕獲保護されたトキは「キン」「ミドリ」を除いて、いずれも短命で死んでいる。また、一九六五年に保護された「カズ」は近江宏^四によると「カズは巣立ち直後の負傷も影響してか発育が悪く、血色もすぐれず貧血状態が長くつづいた。やがて採食量は少なくないの、頭部裸出部の橙色がだんだんと退色し、高野氏らの懸命の飼育もむなしく一九六六年（昭和41）3月29日死亡した。解剖の結果、左腹腔部に大出血があり、これが直接の死因と考えられた」とあり、「痩せおとろえて死なねばならぬ」の表現に当てはまる部分もある。トキの精液の採取があつたという事実は確認できなかったが、中川志郎^{二五}は次のように述べている。

わが国におけるトキの人工増殖は、一九六七年（昭和42）、新潟県佐渡郡新穂村に新潟県トキ保護センターが開設されたのがはじまりである。しかし、当初の保護センターでの人工増殖は最小の規模で実施されるにとどまり、関係者の努力にもかかわらず、みるべき成果をあげることができなかった。成鳥捕獲による本格的な人工増殖計画が実行に移されたのは、保護センター開設から一三年を経過した一九八〇年（昭和55）～一九八一年（昭和5

6)で、野生のトキの全羽数が5羽に減少してからのことである。
(中略)

人工繁殖では、そのふ化条件、育すう条件などの確定のために種々の試行錯誤をくりかえした。クロトキが1972年5月1日に第1号をふ化させ、1975年(昭和50)にシウウジョウトキ、1977年(昭和52)にはシロトキが巣立った。

トキの人工増殖を行う際、人工授精には至らなかったが、繁殖には人の手が加わっている。「おれ」が、捕らわれた後の「死ねば剥製にされてさらしものだ」の描写は、小説の作中では描かれなかったが、『世にも奇妙な物語』のドラマ版では、博物館に可動式で煙草を吸う剥製として「地上最後の喫煙者 穴井龍之介 1998年絶滅」の題名で展示され、多くの来館者の奇異の目にさらされる結末となっている。このことについて筒井は、次のように述べている。

『最後の喫煙者』がテレビドラマになって、僕も出演しました。主人公が国会議事堂の天辺に追いつめられる最後の場面は、さすがに撮影許可が出ないので、「最後の喫煙者」である主人公が剥製にされ、タバコを喫うポーズをとって口から煙を吐いているシーンになりました。^{一六}

ところで、『世にも奇妙な物語』の『最後の喫煙者』が放送されたのは一九九五年一月四日であるので、「地上最後の喫煙者 穴井龍之

介 1998年絶滅」の表記は放送された当時の三年後の世界を意味していることになる。このことは、近未来に嫌煙権運動が行きつく残念な結末を暗示しているのではないかと考えられる。

最後の「彼方の上空から、網をひろげた二機のヘリコプターがゆっくりと降下し、近づいてくる」という一文も、「おれ」がトキと同じ扱いを受けていることを表している。トキの捕獲について中川志郎^{一七}は、次のように述べている。

捕獲には、1980年(昭和55)12月から1981年(昭和56)2月にかけての厳冬期が選定された。この時期には、積雪によってトキの採餌地が限定される傾向があり、捕獲地点を決定するうえで好都合であると思われるからである。

捕獲器具としては、ロケットネット3基、むしろ網2帳が用意された。また捕獲したトキを一時的に収容する特製の輸送箱5個が準備された。捕獲作戦は、まず事前調査(11月26日〜12月12日)によって開始され、捕獲器具の設置場所、給餌によるおびき寄せの地点が確定された。

第一次捕獲作戦は、小佐渡丘陵の片野尾北山地区イナバ、ヤチ、イタヤマに設定された。トキは予定どおり飛来したが、射撃区域内にはいらず失敗におわった(12月13日〜12月24日)。第二次作戦は翌1981年(昭和56)1月6日に開始され、積雪約10センチのなかで時機を待った。1月11日、ついに2羽のトキがイタヤマの予定地にあらわれ、13時11分、ロケットネ

ットによる捕獲に成功した。次いで1月17日、両津市強清水地区に2羽があらわれ、急ぎ捕獲地点をここに移した。1月21日7時18分、この2羽が射程距離にはいり、ただちに捕獲した。最後の1羽は、翌1月22日16時33分、両津市越戸にあらわれたところを、同じくロケットにより捕獲することができた。いずれも傷一つ負わせることのない完全な成鳥捕獲となった。

つまり、「おれ」はトキ同様、網による捕獲がなされようとしており、徹底的に天然記念物として扱われ、周囲の人々に人間として受け入れられずに、珍妙な別の動物という存在にされてしまっている。喫煙者差別によって自由に喫煙する権利を失う問題以前に、喫煙者は人権そのものを失ってしまうだろうという最大の皮肉がここには込められている。

筒井は、嫌煙権運動における喫煙者だけでなく、少数派となった存在が、多数派から罪の意識が薄いまま迫害されるという史実を、トキを連想させるかたちで本作に落とし込んだことで、嫌煙権運動が同じ道を辿りつつあることを裏付けさせている。本作のなかでは「人類の叡智は常に、その愚行が極端に走ることを食いとめるという説があるが、おれはこの説に反対である。極端というものがどれほどのレベルを指しているのか知らないが、過去、人類の歴史を振り返れば愚行が私刑とか集団殺人とかいう極端の一種に走った例は数限りなく存在する」と述べられており、やはり筒井は嫌煙権運動を人間の歴史の中で繰り返される愚行の一つとして捉えて非難して

いる。次の章ではそうした現実の嫌煙権運動を、筒井はどのようにして本作のパロディとして組み込んだのか考察する。

二 嫌煙権運動と本作のパロディについて

嫌煙権運動が本作でパロディとして書かれるときは、運動が及ぼした影響が現実のものよりも過激かつ残忍で、喫煙者が殺されるほどのレベルのものとして書かれているが、これは前章で述べたように嫌煙権運動がいずれ作中と同様のものになってしまう危うさを秘めていることを皮肉として書いたものである。だが、本作における嫌煙権運動の描写は、決してすべてが過大に描かれたというわけではなく、一九八七年に至るまでに及ぼされた実際の影響の描写も多分に含んでいる。本章では、本作執筆当時の嫌煙権運動に関連した時事問題を、筒井はどのように変換し、パロディ化して表現したのか考察する。

二―一 女性編集者と嫌煙を表示する名刺

まず、作家の「おれ」のもとに原稿依頼に二人の編集者がくる場面は次のように描写されている。

ある日、ヤング雑誌の編集者一名がわが家へ原稿依頼にやってきた。応接間で対面すると、うち一名は二十七、八歳ぐらいの女

性であり、彼女がおれにくれた名刺の右肩には大きくこう印刷されていた。

わたしはタバコの煙を好みません

この時期、名刺に嫌煙を表示する女性とはさほど珍らしい存在ではなかったらしいのだが、おれはそれを知らなかった。

ここで、嫌煙を主張する女性編集者が登場するが、これは中田みどりという女性がモデルの可能性がある。中田みどりは一九七八年二月十八日に発足した「嫌煙確立をめざす人びとの会」の代表の一人として活動し、特に『毎日新聞』^八や『朝日新聞』^九といったマスコミで「嫌煙」、「嫌煙権」といった言葉を発案した女性デザイナーとして度々取り上げられている。荒井忠男^〇は、「嫌煙」という言葉がマスコミで使われるまでの経緯を次のように述べている。

中田さんは、広告デザイン関係の仲間で組織する「コンシュートピア創造群」という反公害運動グループの一員で、過去にPCB、石油たんばく、農薬などによる公害を絵本にして訴えるという活動を行ったりした。中田さんはノドが弱く、タバコの煙が苦手だった。

そこで、グループの仲間たちと新しい運動テーマを話し合ったとき、タバコの煙の問題を取り上げてはどうかと提案して、受け入れられた。そして、チューリップの花の中にタバコの煙にむせんでいる子供の顔を描いたデザインに、「嫌煙・タバコの煙がにが

てです」という文字を配したバッジを作成した。これが「嫌煙」という言葉がこの世に登場した最初だった。五一年二月のことだ。

しかし、それだけだったら世間の片隅のささやかな運動にすぎなかっただろうが、バッジができてから半年以上たった五二年七月二〇日の毎日新聞夕刊に、ほかの禁煙運動などといったしよに、「嫌煙・パワー」という大見出しのもとに報道された。おそらく、これが「嫌煙」という言葉がマスコミに登場した始まりだろう。

このように嫌煙権運動の主導者の一人としてマスコミの注目を浴びていた中田みどりだが、嫌煙権運動を批判していた筒井にその存在を知られていたとしてもおかしくない。また、中田みどりは「嫌煙・バッジ」を作成し、その人物が嫌煙家であることを目視できるようにしているが、このことが本作で女性編集者が「名刺に嫌煙を表示する」ことに置き換えられているとも考えられる。作中では「たばこ」を文字で書く際、「煙草」と基本的に漢字で書いているが、女性編集者の嫌煙を表示する名刺には「わたしはタバコの煙を好みません」と片仮名で「タバコ」と書かれている。中田みどりが作成した「嫌煙・バッジ」には「嫌煙・タバコの煙がにがてです」と、「たばこ」を漢字ではなく片仮名で「タバコ」と書かれているが、筒井は「嫌煙・バッジ」を意識して意図的に、同じく「タバコ」と片仮名で書いたのではないだろうか。

二二 新幹線の喫煙席と禁煙席

「おれ」は文壇バーティに参加するために、東京行きの新幹線の喫煙席の切符を妻に購入させたが、妻から切符を渡される際に、次のように言われる。

「四号車だけなんですって。喫煙車をつて言ったら、駅員からけもの見る眼で見られましたわ」

一九八七年当時の時刻表^二によれば、当時のひかり号の禁煙車は全十六号車のうち、一、二、十、十二号車、新型ひかり号は全十六号車のうち、一、二、九、一〇、一二号車であり、それ以外の号車では禁煙の表示がされていない。つまり、いずれのひかり号も当時では過半数が喫煙可の車両であり、四号車は喫煙が可能であった。本作において過激に推し進められた嫌煙権運動であったが、筒井はなぜここでは新幹線の全車両を禁煙車に設定しなかったのだろうか。筒井が、新幹線の喫煙車をあえて一両だけ残してこの部分を執筆した意味について考察する。

一九七八年に結成された市民団体「嫌煙権確立をめざす人びとの会」と弁護士、学者の団体「嫌煙権確立をめざす法律家の会」が一体となり活動した内容について、伊佐山芳郎^三は次のように述べている。

まず、国鉄の列車に禁煙車両の設置を要求することから始めた。

当時、国鉄の中・長距離列車には一両の禁煙車両もなかった。新幹線「こだま」の一六号車だけが禁煙車であった。これは、市民の投書などに答えて、国鉄が一九七六年八月二〇日から実施したものである。しかし、国鉄はその後禁煙車を拡大する動きを全く見せていなかった。そこで、「人びとの会」と「法律家の会」の代表が、国鉄に対して、各列車の全車両のうち半数以上を禁煙車にしてほしいこと、少なくとも一両は早急に禁煙車にするよう要望した。ところがこれに対応した国鉄サービス課長らの回答は次のようなものであった。「少ない自由車両のうち一つでも禁煙車にしてしまうと、長時間我慢しなければならない喫煙者にお気の毒である」と。

(中略)

「人びとの会」と「法律家の会」は、国鉄に禁煙車両を求める署名運動を企画した。(中略) 短期間で五万名の署名を集めた。その後、代表たちは、要請書とともにこの署名を国鉄当局に提出した。それでも国鉄当局の対応にはあまり前向きの姿勢が見られなかった。

いよいよ訴訟提起せざるを得ないというムードが、市民の間に高まっていった。

(中略)

嫌煙権の確立をめざすために、国鉄に禁煙車両の設置を要求して訴訟を提起することは、「法律家の会」の大きなテーマであった

ことは先にも述べたとおりである。しかし、この種の裁判は未だ日本には前例がない。

(中略)

「法律家の会」の二名の弁護士が弁護団を結成し、無報酬で訴訟を担当することになり、一九八〇年四月七日の「世界保健デー」に、東京地方裁判所へ訴状を提出した。

(中略)

この訴訟の主旨は、国鉄に対する禁煙車両の設置要求である。したがって国鉄を被告にしていることは当然として、さらに日本専売公社と国も被告にした。なぜ、国鉄だけにしほらなかったかという、今日のたばこ公害のもとをつくり出しているものは、日本専売公社であり、これに対して無知無策でいる厚生省であるといわざるを得ないからである。

つまり、嫌煙権運動家が日本において初めて裁判を起したのが、列車の禁煙車両の増設の要求であり、同時の訴訟ではあるが行政や日本専売公社よりも、国鉄の嫌煙家への理解や配慮が不足していたことを訴訟の一番の要因としている。国鉄、行政、日本専売公社を提訴したこの訴訟は、「嫌煙権訴訟」と呼ばれ、『朝日新聞』^三などのマスコミでもその言葉が使用されるようになった。伊佐山芳郎は「判例タイムズ」^四で、裁判提起後の裁判期間中の国鉄の対応について述べている。

裁判提起後、情勢は大きく変化して行くことになる。提訴半年後の八〇年一〇月一日から、国鉄は、ついに新幹線「ひかり」の自由席車両の二両を禁煙とした。それから二年後の八二年一月一日から、全国の特急列車の自由席車両の二両を禁煙車とし、今年の四月一日からは、待望の指定席にも禁煙車を設けた。

嫌煙権訴訟は、一九八七年三月二七日に東京地方裁判所で「刺激不快感に留まらない健康上の被害を受けたものと認めることはできない」、「受忍限度を超えない」^五 などとして、原告の請求をすべて棄却する判決となったが、伊佐山芳郎^六はこのことについて次のように述べている。

一九八〇年四月七日の世界保健デーに提訴した嫌煙権訴訟に対し、去る三月二七日東京地方裁判所民事三部は、原告らの請求を全て棄却する判決を下した。しかし、翌日の新聞のほとんどが、一面トップで一斉に原告・弁護団の「実質勝訴」と報じた。

(中略)

判決の理由とするところは、矛盾に満ちたものであり、原告・弁護団の期待を大きく裏切るものであった。そこで通常の紛争解決型の訴訟であれば、当然のことながら、敗北宣言をして、控訴の方針を打ち出すことになる。

しかし本件裁判で最も重要な点は、請求の趣旨で求めている禁煙車両を、今回の判決以前に、原告・弁護団が既に勝ち取って

たということである。言い替えれば、裁判の目的は、既に達していたのであるから、ここを強調することによって、『実質勝訴宣言』を打ち上げたのである。しかも判決は『嫌煙権』を一応法的に認知している「もつともこの点については、江橋崇法政大学教授の異論があるが」。

すなわち、嫌煙権訴訟は裁判で敗訴しているが、訴訟を行ったことで、国鉄の禁煙車両の増設を促す結果となり、社会的観点からみれば嫌煙権訴訟は嫌煙権運動家や一般の嫌煙家にとって良好な環境をもたらすことになった。しかしそれは、言い換えれば喫煙者にとつての敗北ともなった。『最後の喫煙者』は、嫌煙権訴訟の判決が出された一九八七年三月二七日の同年の『小説新潮』十月号に発表されているが、執筆するにあたって、筒井がこの嫌煙権訴訟を念頭に置いた可能性は高い。そのために新幹線ひかり号の喫煙席が一両しか存在せず、その喫煙席までもぞんざいに扱われる様を描いたのではないだろうか。嫌煙権訴訟ならびに嫌煙権運動の行きつく先が、訴訟以前の嫌煙家よりも立場の低い社会的弱者へと喫煙者を追いやってしまっていることを、ここで指し示したのである。

二二三 欧米諸国における禁煙運動

作中の日本における禁煙運動は、欧米諸国にならって行われていると、次のように書かれている。

喫煙者差別はますますひどくなっていた。欧米諸国ではすでに全面的禁煙が成功している。しかるに後進国たるわが国ではまだ煙草が売られ、喫煙者が存在する。これは日本の恥であるといふのではや喫煙者は人非人扱い、町なかで喫煙して袋叩きにあう者が続出した。

「嫌煙」という言葉が初めて出されたマスコミだとされる『毎日新聞』の「モクモクツ『嫌煙パワー』」^{〔一〕}の欄の隣には「喫煙規制は世界の潮流」^{〔二〕}という見出しが出され、すでに欧米諸国での喫煙規制について語られており、次のように述べている。

どうやら、欧米先進国は愛煙家受難時代にはいりつつあるようだ。数年前までは予想もできなかったような、喫煙に対する社会的規制が、いくつかの国で強まっている。

（中略）

たとえばアメリカ。喫煙者率が一九六四年の男五二・八％、女三一・五％から、現在は男三九・二％、女二八・九％に減り、男の喫煙者も少数派になった。となると、喫煙を法的にもなるわけ、二十八州に何らかの規制がある。

（中略）

アメリカでは、喫煙問題は政治的なテーマになっており、議会工作に金がかかる。

以後も雑誌などで、嫌煙権を推し進めるべきだとする旨の論評が書かれる際は、日本よりも進んでいる欧米諸国での喫煙規制について併記されることが多くあり、「世界的な潮流変化」と嫌煙権保護の強化の方向のなかに位置づけるならば、わが国の非喫煙者保護対策は著しく遅れている^{二九}」や「これら喫煙対策においてはわが国は先進国中では著しく遅れている^{三〇}」、「たばこ問題については、アメリカ、ヨーロッパの対策は日本よりも一五年から二〇年進んでいる^{三一}」などと、日本は分煙化などの喫煙規制において欧米諸国の対策よりも遅れていると批判している。

二一四 K・E・K団とマスコミ

作中、加速する喫煙者差別は街の煙草屋への攻撃に止まらず「ついに日本たばこ会社が焼打ちされ、やむなく倒産に立ちい^{三二}」ることになるが、実際の日本たばこ産業株式会社は一九八五年四月一日に日本専売公社からの改組で設立された。つまり現実と照らし合わせると場合、「日本たばこ会社」は一九七八年十月時点で、設立から約二年でのスピード倒産となる。

「日本たばこ会社」が倒産した後の喫煙者にとつての暗黒時代で登場した「K・E・K団」については「夜な夜な三角の白い覆面をした嫌煙権^{K・E・K}と称する連中が松明の火をかざして町を徘徊し、残りの少ない煙草屋に放火してまわるといふ世の中になったのである」と

述べられているが、モデルはK・K・Kという秘密結社である。K・K・Kについて瀧澤龍彦^{三三}は次のように述べている。

この団体は、アメリカ南北戦争直後の一八六六年に発足した。南部諸州の敗北により、北部連盟の軍隊が南部を占領し、黒人が解放されて市民権をあたえられ、旧白人指導者が選挙権を奪われると、こうした処置に不満をいだいた南部連盟の旧軍人の一部は、白人優位の伝統を回復し、失われた彼らの政治的社会的特権をふたたび取りもどすべく、テネシー州のナッシュビルに、「見えざる南部帝国」と称する秘密結社を組織したのである。これが一般にK・K・Kの名で知られる黒人排斥の秘密団体である。

K・K・Kという奇妙な名称は、一説によると擬声語で、旧式のライフル銃に弾丸をこめるとき、そういう音がするといわれる。また別の説によると、ギリシア語の *Ku-Klos* (仲間) およびケルト語の *clan* (氏族) の転用であろうといわれているが、確証はない。

クランの最初の団員たちには、無益な血なまぐさい残虐行為を犯す意思はなかったと思われる。彼らの目的は、ただ黒人たちの恐怖心をあおり、彼らの無礼な出すぎた振舞いを懲らしめるだけに止まっていた。

(中略)

しかし、やがてこの無邪気な手品や仮面行列が、不幸な有色人種に対する残忍なリンチや放火、殺人や略奪などに発展した。ク

ランの団員たちは、制服を着て道路を巡察し、彼らが定めた時刻以後に出会う黒人を、革の鞭で打擲した。また投票権を行使する黒人や、黒人に同情的な白人をも脅迫した。

その後、K・K・Kは一旦解散されたものの、一九一五年に復活し、過激な活動が続けているが、そのことについても濫澤は次のように述べている。

一九二三年に、テキサス州だけで五百以上の暴行傷害事件があった。一九二三年には、オクラホマ州で二千三百のリンチ事件があった。反抗的な黒人や彼らの同調者に対して、克蘭は次のような脅迫状を送った。「汝は好ましくない人物である。ただちに立ち退くべし」と。そして、もし彼が言うことをきかなければ、司令にもとづいて懲罰隊が送られ、さまざまな暴行を加えるのである。有名な「タール・アンド・フェザー」という刑罰は、全身に溶けたタールを塗り、その上を羽毛でくるんで担ぎまわるリンチである。もつとひどいのは、中に人を閉じ込めたまま家に火をつけたら、酸を用いて焼印を押ししたり、手足を切断したりする刑罰であった。

まもなく世論や新聞が、筆をそろえて目にあまる克蘭の暴虐行為を攻撃しはじめた。

(中略)

連邦政府もまた、アメリカ民主主義を毒するこの危険なファシ

スト団体に対して、きびしい態度でのぞむようになった。人々が報復を怖れていたので、克蘭の犯罪の証拠しらべには非常に困難が伴ったが、FBIはやがて団体を北部から駆逐し、南部に追いこむことに成功した。ニューヨーク州では、一九二八年に秘密結社禁止の法律が通り、あらゆる団体はメンバーのリストを提出しなければならなくなった。一九三〇年以後、クー・クラックス・克蘭はだんだん人々の口にのぼらなくなった。

一九八〇年代のK・K・Kに関しては、浜本隆^{三三}が次のように述べている。

だが、一九八〇年代、会員数はしだいに減少し、大規模な克蘭は消滅する。克蘭崩壊のきっかけは、一九八一年に就任したロナルド・レーガン大統領の指示で、右翼団体のテロ活動に対する捜査が徹底されたことによる。

作中のK・E・K団は、極端な差別主義で過激な行為をする集団として、直接煙草を吸う喫煙者のみならず喫煙者を支援する「残り少ない煙草屋に放火」まで行う徹底さであり、「おれ」や日下部さんの家への襲撃、放火もしている。しかし、実際のK・K・Kが一九八〇年代にはすでに全盛期の勢いを失った退廃的な集団であったことを鑑みれば、筒井が現実の嫌煙権運動家を時代錯誤、見当違いの集団として扱って皮肉を込めていたということがわかる。

ただ、作中の「マスコミ、特にテレビ番組がK・E・K団を焚きつけてわれわれの家を襲撃させ、その焼打ちの様子をニュースにしようというのです」や「われわれの敵は、嫌煙権団及び、今やその手先となり果てた警察・自衛隊にとどまらず、WHOや赤十字をうしろだてにした全世界の良識といういやらしいものであったのだ」のように、世間に非難されたK・K・Kとは違って、K・E・K団はマスコミや世論によって支えられているが、これは、運動の推進のためにマスコミを活用した実際の嫌煙権運動家のことを指している。嫌煙権運動の躍進のためにマスコミを利用していたことについて、伊佐山芳郎^{二四}は次のように述べている。

金もなく、権力もない嫌煙権運動が、喫煙規制の社会的制度作りの世論形成に力を発揮するためには、マスコミを通じて運動を広くアピールすることが最も効果的である。嫌煙権が、急速に市民権を獲得することに成功しているとすれば、その大きな要因の一つは、マスコミの機能である。(中略) 提訴は、予想通りの社会的インパクトを持った。即ち提訴から結審、そして判決に至るまで、テレビ、ラジオ、新聞、雑誌などを通じて、嫌煙権訴訟がかなり頻繁に取り上げられるところとなった。しかも、現実には提訴後次から次に、禁煙車両が新設、増設されていくというダイナミックな展開になり、文字通り訴訟が政策形成機能を劇的に果たすことになったのである。もともとマスコミへの期待とその役割を論ずるにあたって忘れてならないことは、やはり平素からの情報

提供が重要だということである。

このように、現実におけるマスコミや世論が、嫌煙権運動と密接な関係にあり後押しする存在であったことを踏まえると、作中のK・E・K団を支える「マスコミ」や「全世界の良識」と照らし合わせることで、喫煙規制に関する現実世界の世間全体の風潮が、誤った方向に向かっていることを痛烈に批判するものとなっている。

二一五 喫煙率と少数派

喫煙者差別の被害にあっている「おれ」は、ある日人権擁護委員会に電話をし、応対に出た男と喫煙者が少数であることについて、次のような掛け合いをしている。

「しかし、今や喫煙者の方が少数なんですよ」
「ずっと以前から喫煙者のほうが少数です。こっちは多数の利益を護る組織です」

本作が『小説新潮』に掲載された一九八七年の成人喫煙率は、日本たばこ産業^{二五}のデータによれば、男性が六一・六％、女性が十二・四％である。男性の過半数は喫煙していたことになり、男性に限れば少数であったとは言えない。だが、女性の喫煙率が低かったために、成人全体でみれば少数派であったとも考えられる。一九六五

年以降の成人喫煙率においては男女ともに、一九六六年でピークを迎えており、男性が八三・七％、女性が十八・〇％であった。その年以降、男女ともに喫煙率は低くなっていくが、女性の喫煙率が、ピークの一九六六年と一九八七年を比較して四・六％の減少であったのに比べて、男性の喫煙率が二二・一％の減少と、成人男性の全体の数でみれば大幅に減少している。女性の喫煙率はそもそも男性に比べて低かったため、年々減少しているとはいえ割合はほぼ横ばいであったが、男性の喫煙率の減少は著しく、二〇〇二年には四九・一％と半数を割り込み、それ以降も減少し続けている。しかし、男性の喫煙率が一九八七年までに年々減り続けたといえども、まだ一九八七年当時の男性の過半数が喫煙していたデータを踏まえれば、やはり喫煙者が少数派であったとは断言しづらい。新堂幸司は、同じく一九八七年の「嫌煙権判決をめぐる^{三六}」において、嫌煙家をマイノリティーと見立てて、次のように述べている。

いろいろな点があるのですが、現在たばこを吸わない人の気持が、吸う人にとどの程度理解されているかという点から言いますと、たばこを吸わない人の気持というのはあまり理解されていないと思います。

そういう意味から言うと、喫煙を嫌う人、嫌煙を主張する人はある程度社会のマイノリティーに属しているというのが実態かなと思います。喫煙に対して社会的寛容があるという言葉が、判決で堂々と言われるとすれば、嫌煙権者はやはりマイノリティー

に属するかなと思います。そうだとすると、逆にマイノリティーなるがゆえにもっと大切に、その人たちの考え方を社会全体で評価していく方向を考えてもらわないと困るだろうと思います。

つまり、嫌煙家にとって、一九八七年当時の喫煙をめぐる環境は「最後の喫煙者」の世界とは反対で、非喫煙者の方が男性の喫煙率の高さや煙草の煙を我慢しなければならないという世間の風潮の観点から、少数派の立場であったと捉えることができる。しかし、世間での嫌煙ムードに止まるところがないことを、筒井は喫煙規制の時事問題から予期したために、実際に減り続ける喫煙率と合わせて、喫煙者が将来的に社会的弱者としての少数派となりえることを本作で「喫煙者の方が少数」という描写で表現したかったのではないだろうか。愛煙家である筒井にとって、喫煙ができていた場所を奪ってしまう嫌煙権運動こそが「喫煙者差別」であり、嫌煙運動家がマイノリティーの排除と同じことを行っている主張する意図がここには込められていたとも考えられる。

本作において、実際の嫌煙権運動の経緯が詳細に書かれた箇所を見出すことは一見しづらいが、筒井は出来事を直接的に書かず、暗にパロディ化することで、一連の流れを描く試みをしている。筒井は、虚構の世界で行き過ぎた嫌煙権運動を設定することで、現実世界での喫煙者の暗い行く末を示そうとしているが、そのなかでパロディ化された事象がもはやパロディに収まらずに、実際に起こりつつ、または既に起こっているという、現実と入り混じった完全な

虚構ではない世界を描いたことで、笑うに笑えない皮肉さや恐怖を増大させている。では次に、筒井が喫煙、嫌煙権運動や運動家などをどのように捉え考えていたのか、本作の描写に合わせて、筒井が書いた煙草に関するコラムから読み解く。

三 筒井康隆と煙草の関係について

筒井は、「最後の喫煙者」執筆以前から嫌煙権運動に反対する旨のコラムを書いており、近年に至るまでその主張は一貫している。本章では、筒井の煙草と喫煙にまつわる価値観や嫌煙権運動家に対する考えなどが述べられたコラムを、本作に沿って整理する。ちなみに、インタビュー形式の記事などで適応されない場合を除いて、筒井は煙草を「すう」と書く際、「吸う」ではなく「喫う」と表記しているが、ここには筒井の喫煙に対するこだわりや愛着が関係しているものと考えられる。

まず、本作において「おれ」が重度の喫煙者であることを述べる際には「青年時代からのヘビー・スモーカーであるおれ」と書いているが、筒井は煙草を吸い始めたときのことについて次のように述べている。

私は高校で演劇部に入ったんですが、芝居がうまいからとすぐに舞台に出させてもらえたんです。森本薫の『華々しき一族』でした。そこで演じたのが、タバコを喫う役でした。いちばん前の

席の校長がいやな顔してたけど(笑)。

だから、十六歳のときに喫煙のはじまりですよ。三

また、「僕の親父も愛煙家で、子供の僕を膝の上に乗せてたばこを吸っていました^三」と述べているように、幼少期から煙草の煙を吸う環境にいたようである。

二人の編集者が「おれ」の家に訪ねてきたときには、「この時期、名刺に嫌煙を表示する女性はさほど珍らしい存在ではなかったらしい」と書かれているが、本作執筆前の筒井は、煙草の煙を嫌う女性について次のように述べている。

新聞の読者投稿欄で嫌煙権特集をやった。発言者のほとんどが女性であつたが勿論一般に女性は喫煙しないからであらう。そしてほとんどが主婦であつた。つまり亭主の喫煙に文句をつけているのである。即ち亭主の喫煙を自分ではやめさせることができなかったものだから腹を立てて投稿しているのである。いわく「毒とわかつていてなぜ喫うか」「家が臭くなる」「子供に毒だ」「家族全員が迷惑する」「何よりもまず妻である自分がいちばん迷惑している」「手前の大事な亭主をこきおろした上、署名して公表しているわけであつて、もはや愛情もへったくれもない。

だいたい女性の多くには同情心が欠けていて「惻隠の情」なんてことも理解できぬ人が多い。煙草を喫わぬからではないかと思う。というのは嫌煙権を主張する男性にもそのての人物が多いか

らだ。嫌煙権運動の推進者に女性が多いのもうなずける。 三九

煙草を嫌う傾向にあるのは男性よりも女性にあるという考えは、本作を執筆する以前にすでに筒井の念頭に置かれていたために、嫌煙権運動家の代表として女性編集者が描かれたのである。

女性編集者が「おれ」やその他喫煙者の悪口を多くの雑誌に書いたことに対抗して「おれ」が行ったことについては、作中、次のように書かれている。

おれが毎号コラムを書いている「真相の噂」という雑誌の編集長が電話してきて、今や権力と化した嫌煙権運動の弾圧に屈してはならない反撃しろと焚きつけたため、おれはさっそくおおよそ次の如き主旨の文を書いて同誌に発表した。

この一文は、実際に筒井が毎号コラム連載していた『噂の真相』という雑誌の「笑犬樓よりの眺望^{四〇}」がもとになっている。本作で書かれていた文章とほぼ同様の旨のものが掲載されていたが、本章の後で述べるように、本作では書かれていなかった一部の非喫煙者への一定の理解が置かれた記述もあった。

「おれ」の書いた非喫煙者を批判する文章に反論がくるようになり、その中には「こっちの書いた文章をそのままひきうつして非喫煙者という語を喫煙者に入れ替えただけの無知無能な反論の投書」があると書かれているが、筒井のもとにも実際に反論の投書が送ら

れたと、次のように述べられている。

と、いうような内容であったが、早速これに反論の投書がきた。これは典型的な非喫煙者の文章であった。なんとわしの書いた文章の頭にいちいち「喫煙者は」とつけ加えただけなのである。「喫煙者は意味なくここにこしている。そしてたいてい、会つていても面白くない。喫煙者は話が表面的で話題が軽い」といった調子で主語を変えただけなのである。同じやるなら無理ではあるが「そのことばはそのまま喫煙者にお返ししたい」とでも書いてから、あらためて自分の意見を述べるならよいが、最後までこちらの文章を引き写すだけで本人の文書は出てこない。恐るべき怠惰さによって思索や論理の構築ができない非喫煙者の精神をまざまざと見た思いであった。 四一

作中の「真相の噂」に書かれた嫌煙権運動批判の文章は「喫煙者差別が激しいようであるが、これは過激的な人間に非喫煙者の単純さが加わるからである」という一文から始まり、その後も非喫煙者の短所や特徴を述べているが、筒井はこの他に嫌煙権運動家の特徴を次のように述べている。

面白いのは反嫌煙権の論客がみなきちんとした文章を書いているのに対して、あとで述べるようなデマゴギーの混入したスローガンを金科玉条のように繰り返すだけの嫌煙権の方の論客にま

もな文章が乏しいことである。これは逆に言えば口論となれば嫌煙権論者の方が弁が立ち、じつくり考える性質の反嫌煙権の論者が負けてしまうという事実になってあらわれる。^{四一}

僕は嫌煙権論者は、それが例え大臣であろうが、一種の『神経症』だと思えますね。神経症の一種で「肛門愛」というものがある。これは、幼少時にトイレのしつけを厳しくされた結果、几帳面、清潔好き、整理整頓、時間厳守とか、礼儀作法にうるさいとかの性格が形成されることを言うんです。^{四二}

そして筒井は、非喫煙者が嫌煙権運動に参加する直接の原因が煙草の煙だけでなくストレスにもあることや、元喫煙者がそのストレスのために嫌煙権運動に加担する傾向にあることについても、次のように述べている。

しかしそれにしても最近の嫌煙権運動の高まりは異常であり、今や単なる嫌煙権運動とさえ言えなくなってきた。たとえ他人に迷惑をかけなくても煙草をやめろというのである。何かのストレスを発散させたいための喫煙者いじめとしか思えない。現代病の大半はストレスが原因だが、煙草を無理やりやめさせられたりしたやつはストレスが高じて喫煙者に対し攻撃的になるから、根本的な理由はそのかもしれないな。もちろんおれは、ストレスが嵩じて早死にしたくはないから煙草はやめないつもりだ。他の喫煙者

諸君も、やめてはなりませんぞ。たちまちストレスで若死にします。^{四三}

しかし、「これはタバコとは別のことで怒っているんだな」という感じがありました。「タバコが嫌い」ということではなくて、ほかのことでイラついているんだな、と。それが今やもう証明されてしまいましたね。明らかにタバコが、あらゆる不満の“犠牲”になっている。「禁煙」という一点に人々のはけ口が集約されていますね。

(中略)

思考能力の低下がとくに激しいのは、以前タバコを喫っていた禁煙した人たちですよ。やたらヒステリックになって、人がタバコを喫っているのが我慢できなくて、ギヤーギヤーわめく。あれは一種の精神異常ですね。自分もこの間まで喫っていたクセに、やめたとたん、禁煙によるストレスを嫌煙権運動で発散させている。

タバコをやめた連中は、きつと長生きしてゲートボールしたり、行方不明になりたいんでしょう(笑)。でも恐らく短命なんじゃないかな。^{四四}

一般に、たばこを吸わない人のほうが言葉が激しく、喫煙者に執拗に噛みつく傾向があります。とくに不思議なのは、元喫煙者の喫煙者に対する攻撃性。長年、たばこを吸っていた人がやめた

日から突然、禁煙ファシストになってしまふ。あれもストレスの原因だと思ひます。喫煙者はおとなしい人が多く、多少、罵られても暴言や暴力に訴えない。だから嫌煙派は、物いわぬ少数派をいじめるのが楽しいのでしょう。それだけ日常のストレスが溜まっている、ということ。結論をいへば、最大の焦点は嫌煙派のストレスをいかに解消するか、ではないか(笑)。あちらも大変で、なにしろ喫煙と癌を結び付ける医学的根拠がないから、今度は副流煙が悪い、という。四六

だが、筒井は非喫煙者を一方的に批判しているのではなく、非喫煙者にも喫煙者を労る人々がいることを、作中でコラムを書いて『真相の噂』のモデルになった『噂の真相』の「笑犬樓よりの眺望^{四七}」で補足しており、次のように述べている。

勿論小生、非喫煙者のすべてにこんなことをいうのではない。小生の見知っている非喫煙者はすべてすばらしい人物ばかりであり、他人の喫煙にけちをつけたりはしない。

(中略)

勿論小生、女性のすべてにこんなことを言うのではない。小生の見知っている女性はいずれもすばらしいキャラクターばかりであり、他人の喫煙にけちをつけたりしない。おれの吐いた煙をも一度胸に深ぶかと吸いこんで「ああ。あなたの吐いた煙なのね」といって感激し眼をうるませるのは強ち妻だけではない。

作中の、嫌煙権運動への反撃の文章の中では「喫煙は人間を情緒的にする偉大な発見であつた」のように、煙草が心身ともに良いと書かれているが、筒井は次のようにも述べている。

肺癌は誰だつてこわい。そしてタバコが健康に悪く、ヘビー・スモーカーが肺癌になりやすいことだつてよく知っている。だからタバコを喫う時だつてある程度びくびくしながら喫っている。そんなことぐらいなら教えてもらわなくても自分でよく知っている。

びくびくしながら喫う、そのためにタバコはうまいのである。高校生時代、見つければ叱られるとわかつていながら便所にかくれて喫つたあのタバコのうまかつたこと、これはぼくひとりの体験ではあるまい。タブーに触れる時の快感、これは人間に共通したものである。いけないいけないと思ひながらついに矢も楯もたまらずぶつ撞く時のオナニーの快感にも似たものがある。やつちまつたと思うあの虚脱感も、喫煙と共通する感覚である。こういった感情がなければ、タバコなんてさほどうまいものではないのである。四八

つまり筒井は、煙草が体に悪影響を及ぼす一方で、その喫煙の背徳感が快感につながると、結果的に喫煙を肯定している。また、煙草には文化的側面があることも次のように言及している。

税収への貢献度も高いし、たばこ農家の存在や、文化としての長い歴史もあります。たばこをおいしく味わうためにパイプや葉巻、根付など喫煙具がこれほど発達したのは、喫煙が文化であることの証明です。その文化まで拒否しようというのは傲慢です。^{四九}

作中、「おれ」は「アメリカの「MORE」という煙草」をデパートの外商部員に持つてこさせていたが、「MORE」は実際に筒井が喫煙していた煙草である。筒井は、本作が発表された後に次のように述べている。

半年ほど前、某英字新聞におれの写真が掲載された。「モア」という茶色くて細長い紙巻煙草をくわえている写真であつたにかかわらず、その煙草がホワイトで抹消されていた。嫌煙権ファッショに対する新聞社の自己規制であつたに違いないが、瞬間、自分が自由主義国家にある国民ではないような気分にはせられたものである。^{五〇}

筒井の喫煙していた煙草の銘柄については、筒井自身が詳細に述べている。

五十年間、毎日平均二十五本、だいたい三十分一本ということになるが、十八歳の時から喫煙し続けてきて、しかも作家にな

った三十歳以後はしばらくあの缶入りピースだったのだから、もういい加減飽きてもいい頃だろう。わしより若い人の中には、えつ煙草つて飽きるものなのかと疑問に思われるかたもおられようが、これは事実である。

これに似たことは以前にもあつた。持ち歩いて喫うにはピースは不便だし、格好いいからというのでしばらくはあの長い細巻きのモアを喫っていたのだが、これは長過ぎて途中で飽きてしまう。何よりも仕事中に喫っていると灰皿に乗せたまま忘れてしまい知らぬ間に二本、三本と灰皿の上の喫いかけが増えていたり、机に焼け焦けを作ったりしてしまうのがよくない。そこで、それ以来短い細巻きのボーグのレギュラーを喫うことにして今に至っている。わしは薄情な人間で唇が薄いから、細巻きの煙草がちょうどいいのである。^{五一}

「おれ」は文壇パーティーで挨拶するために上京せねばならず、新幹線を利用することになってしまふ、という場面があるが、筒井は新幹線での喫煙について、次のように述べている。

ぼく自身は最近煙草に飽きてきて、三十分一本の割合になりました。新幹線の禁煙車両で三時間、四時間乗つても平気です。歳のせいですね。^{五二}

新幹線に乗っている時は3〜4回喫煙ルームに行くくらいです

本作では作中、「欧米諸国ではすでに全面的禁煙が成功している」のように、欧米の禁煙運動についても触れているが、筒井は欧米での禁煙運動について次のように述べている。

今さら、禁酒法という愚拳を煙草でヒステリックにくり返そうとしているアメリカの真似をしてどうするのだ。聞けばニューヨークでは路上喫煙歩行者に対して、周囲から罵声が飛んでくるというではないか。アメリカのヒステリーもついにここまで来たかと感嘆する。^{五四}

——当時の禁煙運動の状況は？

筒井 アメリカで禁煙運動が勃興しているというのは知っていました。

そして、日本人のほうが徒党を組みやすく、マスコミやおかみの言うことは信じるんだから、アメリカがこうなっているなら、日本ではこれはもう戦争中みたいな騒ぎになるというのは、予測がつきましたね。

日本人は、偉い人のいうこと、世の中の風潮、体制に対して、右へ左へ激しいですからね。アメリカは個人主義だから、それほど徒党を組まないんじゃないんですか。^{五五}

本作では、マスコミについて描写される箇所も多いが、嫌煙権運動を推し進めるマスコミについては本作の執筆以前に筒井は次のように述べている。

喫煙者差別の風潮にマスコミが加わり、最近はお祭り騒ぎの様相を呈してきた。新聞の読者投稿欄で嫌煙権特集をやった。^{五六}

マスコミが、嫌煙権運動を加速させる様子は「最後の喫煙者」を執筆するすでに二年前には強く筒井に印象付けられ、K・E・K団を焚きつけるマスコミの図を描かせたのではないだろうか。

「最後の喫煙者」掲載の後も筒井は嫌煙権運動におけるマスコミの役割について批判している。

いわゆる嫌煙権訴訟なるものが昨年、東京地裁で敗訴したのも、こうした統計のたらめさが敗因であつたらしいが、あまり大きくは報じられなかった。なるほどなあ。新聞が嫌煙権フアッシュに遠慮したのであつたか。^{五七}

確かにマスコミが俗物に入りやすい些末事ばかりを報道し、その背後の大事を扱わなくなつて久しいが、区役所もまた未解決の厄介な問題から都民の眼をそらせようとしての些事へのこだわりなのであろう。^{五八}

なぜこのように「肺癌」「肺癌」と、喫煙と肺癌を結びつけようとするのか。喫煙でかかるいちばん多い病気は肺気腫だが、なぜその事実を無視してまでの「肺癌」なのか。言うまでもなく自動車による被害から眼をそらせようとする自動車産業と連動したマスコミの企みによるものである。マスコミにとって自動車産業は最大の広告主である。これに反してたばこ産業は今や大つばらにその効用を宣伝できなくなってしまうていて、たいしたスポンサーではない。だからこそ「排気ガスによる肺癌」を「煙による肺癌」であると言いくるめ、肺癌の原因を煙草に転嫁しようとするのである。

さらにはまた、嫌煙権論者が持ち出してくる統計のてならめさも指摘しなければならない。喫煙者の妻の肺癌権率もでたらめであつたらしく、妻の職業、年齢、環境などは何も書かれていない。嫌煙権訴訟が東京地裁で敗訴したのも、この統計のてならめさが敗因であつた。マーク・トウエインが言うように「嘘には三種類ある。そのひとつが統計」なのである。五九

言論の自由をとつてみても、ほんとは新聞なんかがその代表なんだけど、新聞がそもそも愛煙家の言は載せない。載せると大変なことになってしまう。これは戦争中の大本営発表だけを載せるという、それと同じことですよ。まあ私は新聞の読書欄にそれとなく書きましたがね（笑）。

嫌煙権論者の意見は載るけれども、われわれ喫煙者の意見が載

らない。マスコミが嫌煙権運動に同調している以上、喫煙は「悪いこと」に決まっているのだから、どんなに差別的なことをしてもかまわないと思つている。これに対しては何を言つても無駄だし、もう、どうしようもない。六〇

また、筒井は嫌煙権運動とマスコミの関係に関連して、酒及び泥酔者と車の排気ガスについて言及し、喫煙者よりも先に取締まるべき対象だと批判している。

喫煙者に対してあれだけきびしく非難していながら、飲酒者に対して甘いのはなぜか。飲酒者が女性にからみ、プラットホームから路線につき落とされて轢死した事件があり、つき落した女性の方は無罪になったから、必ずしも法律が飲酒者に対して甘いわけではない。しかしおれは世論のことを言っているのだ。飲酒運転は有罪だが喫煙運転は無罪である。なのに喫煙乗車は許されず、飲酒乗車は許されている。許されているどころか駅員から介抱までもしてもらい、優遇されている。

喫煙者はだいたいにおいておとなしく、禁煙と書かれたところでは煙草を吸わない。電車の中はたいい禁煙だから喫いたくても我慢している。飲酒者はそうではない。乗ってきて他人にからむ。反吐を吐く。からまれたりゲロゲロを吐かれたりしても我慢するが、副流煙は我慢できないというわけか。喫煙者に対してあれだけ批判するのであれば、車内でのゲロゲロなどはや死刑

ではないかと思えるのだが。六一

千代田区で、いよいよ歩行者の喫煙取締りが始まった。愚拳と言うべきであらう。

まあ、あんな排気ガスの立ちこめる通りをふらふら歩く、なんてことはわしはやらないし、せいぜいホテルや劇場へ行った際のタクシの乗り降りでしか歩かないのだから関係はないのだが、許せないのは区の役人が実施に当って「そういう時代になつてきたのですから」などとほざいていることである。どんな時代になつてきたというのだ。排気ガス渦巻く中で喫煙に目くらまされてゐるなどは材木と爪楊子を見間違つていのすかたんであり、人間がコトの大小を分別できなくなつて馬鹿になつてきた時代といふことなのか。

(中略)

だいたい喫煙者のマナーによる迷惑と、泥酔者による迷惑のどちらが大きいかといへば、これは比較にならぬほど泥酔者による迷惑の方が大きい。同じような迷惑防止条例で取締られてはたまつたものではない。六一

―反喫煙運動の黒幕は？

筒井 敵ははっきりしています。自動車業界とアルコール飲料業界ですよ。

嫌煙権運動の発祥であるアメリカでは、自動車産業が自分たち

に有利な政策を容易に政府に強制することができると。自動車産業に対する批判、例えば、排気ガスによる地球温暖化とか、公害による喘息疾患、交通事故なんかから大衆の眼をそらさせて、嫌煙権運動に誘導している。タバコをスクープゴートにしているんですね。

自動車によつて人類が滅亡することはあつても、タバコの煙で人類が消えていなくなることはないからね。もしそうであれば、とうの昔に人類は絶滅していますよ。

また、アルコールによる中毒症とか、依存症、犯罪だつてタバコの比ではありません。アルコールを一気飲みした若者が急性アルコール中毒で死ぬことはあつても、タバコの一気吸いをした若者が急性ニコチン中毒で死亡した例はありません。酔つ払いが電車内で婦女子にいたずらをしたり、乗客にケンカをふっかけたり、悪臭漂う反吐を吐いたりしても、タバコのために喫煙者が婦女子にいたずらしたり、社内で反吐を吐いたりすることはない。そして本来であれば、その実態を指摘する役目を担つているマスコミが、それを言わない。自動車業界、アルコール飲料業界は、大きな広告主だからね。

行動分析学というのは、「いかにしてタバコをやめさせるか」なんてことをやつていたんだけど、そのいちばん偉い先生が酔つぱらいのせいでプラットホームから落ちて死んだ。いかにして酒をやめさせるか」を研究すべきだったでしょうね(笑)。タバコの警告表示も、だんだん内容がエスカレートしてきてい

ます。

筒井 J-Tは「喫煙は肺がんの原因の一つとなります」「心筋梗塞の危険性を高めます」と、自分のところの製品の悪口を言っている。自分の企業の製品の悪口を言うなんて、そんな会社がこの世界にありますか。気がおかしい。

僕を、J-Tの社長にしないかな。社長になったら「喫煙は健康の害になります」なんてメッセージ、取っ払いますね。何もWHOの言うことを聞くことはない。

それで、あのスペースをどうするかというと、「喫煙キャンペーン」「反禁煙キャンペーン」を打つ（笑）。

「タバコは情緒を豊かにし、精神を安定させる効果を持っています」

「自動車は人間の健康に害があるばかりでなく、人類滅亡を招く危険物です」

「お酒の飲みすぎは健康を害し、他人に迷惑を及ぼし、犯罪を招く恐れがあります」

嫌煙権者がかんかんになって怒って不買運動はじめるかもしれないが、痛くも痒くもないもんね（笑）。
六三

しかし、筒井は嫌煙権運動が加速する原因の一つには、一部の喫煙者のマナーの悪さがあるとも述べ、批判や注意喚起をしている。

たしかに喫煙者であるわしでも腹を立てるほど喫煙作法の悪

いやつというのは存在する。これ見よがしに吸殻をポイとはじいて捨てるやつがいるが、あれは西部劇などでよくやるやつで、昔は格好いいとされたものである。わしは携帯灰皿を持ち歩いているのだが歩行者喫煙者を見かけたら、まず携帯灰皿を持っているかどうかを確かめ、持っていないやつからのみ罰金を取るぐらいの大らかさが取締りにはあつていいのではないか。

煙草を人さし指と中指の間に挟んで、手を振って歩く馬鹿もいる。原宿では、主に女性である。これがすれ違う人の手にあたれば火傷をする。人混みの中でこれをやられてはたまらぬ。わしは原宿など人通りの多いところで喫煙しながら歩く場合、煙草の根もと即ち吸い口の部分を親指と人さし指でつまんで持ち、火のついた部分を掌の中へくるみこむようにして歩くことにしている。これはかの名作『デッド・エンド』でやくざに扮したハンフリー・ボガートがやっていたことであり、いささか上品さには欠けるがなかなか恰好良く、わしなど昔から、嫌煙権などと誰も言わなかった四十年前から実行している。
六四

筒井は「紫福談^{六五}」でこれらのマナーを守ることを「嫌煙者を恥じ入らせるほどまでの紳士的な振舞い」と述べ、同じく「紫福談」で次のようにも述べている。

やはり、じわりじわりと反撃の狼煙を、消極的にあちこちであげていくのがよいと思う。しかしこれには喫煙者全員の協力が必要

である。今までのようにおとなしくしていれば禁煙ファッショはとどまることを知らぬということをよく認識すれば、協力せざるを得ない筈だ。以下に記すのは、喫煙者ひとりひとりに望む、禁煙ファッショとの消極的戦闘手段である。

(中略)

一、禁煙タクシーには乗らない。乗車時に必ず確認し、乗つてから禁煙だと気づいた時はただちに降りる。乗った分のタクシー代を惜しんではならない。

一、禁煙のレストランには入らない。入る時に確認し、入ってから禁煙だと気づいた時は速やかに店を出る。料理を注文してしまつていたり、食べかけていた場合は、その料金を支払つて店を出る。料金を惜しんではならない。

(中略)

これを読まれた読者は、ただちに以上のことを行動に移していただきたい。

このように、喫煙者が嫌煙権運動に反抗する際に金を払うことを惜しまないように促している。このことは、前述の「嫌煙者を恥じ入らせるほどまでの紳士的な振舞い」と合わせて、「最後の喫煙者」で書かれている「われわれ喫煙者の貴族」に精通するものとなっている。

作中の、K・E・K団の襲撃にあう前の「おれ」と目下部さんの

会話で、「おれ」は目下部さんに「賛成です。のちの世の教科書に『彼らハ死ンデモロカラ煙草ヲハナシマセンデシタ』と謳われるような、立派な死にかたをしましょう」と話しているが、筒井自身も次のように述べている。

いずれ「煙草を殺したのは誰か」という懷古談が書かれる時代となった際、何しろ全世界的な潮流であつたがゆえ、ヒトラーやマッকারシーの悪名のように名指して呼ばれるほどの個人はいないにしろ、せめてこれに一矢報いた人間として名をとどめたいという気持ちはある。 六

筒井は、自身の煙草にまつわるものの出来事、価値観をパロディ化したことにより、「おれ」の考えが筒井康隆本人のものであるというところ強く主張して、嫌煙権運動に抵抗する筒井の姿勢を読み手に表明している。筒井は、近年に発表したコラムに至るまで喫煙の重要性を訴え、それと同時に嫌煙権運動家が活動を行う原因の性格的短所や問題点について言及することで、日々厳しくなっていく喫煙の規制に異議を唱え続けている。また、嫌煙権運動によって喫煙者の権利を奪われるばかりではなく、理性的な方法で抵抗していくべきだと述べ、次のようなことも語っている。

これらが大きな経営問題となり、ふたたび喫煙者容認の機運が高まりはじめた時、禁煙ファシズムは躍起となって反対し、この

傾向をなんとか食い止めようとするであろうが、われわれはこれに追い打ちをかけ、喫煙者の市民権を少しでも回復させようではないか。もしかすると勝利は近づいているのかも知れず、われわれの未来は案外明るいのかも知れないのだから。^{六七}

筒井は本作で、苛烈な喫煙者差別が行われるようになった世界を描き、現実でもいずれそのような状態になるとコラムなどで述べているが、その一方では、早い段階で喫煙者たちが協力し合うことで、本作と同じ末路を辿ってしまうことを回避できるのではないかと、喫煙者たちの未来に光明を見出している。

おわりに

当初より現実の嫌煙権運動は、喫煙者の煙草を吸う権利や自由を認め、喫煙可能な場所の確保したうえで展開していくという方針となっていた。しかし、喫煙可能な場所は屋外屋内を問わず日に日に減少し続けており、近年では、喫煙後の四五分間はエレベーターを利用しないように求める市役所が出てくる^{六八}など、嫌煙権運動が及ぼした影響は、今日、本作の描写に近づきつつある。

筒井は「空中喫煙者」という短編小説を『小説新潮』二〇〇三年十月号で発表した。そのあらすじは、煙草を喫うことでからだを宙に浮くようになった主人公の老人が、最後には宙に浮いたまま強風に煽られて行方不明になってしまふというものである。そして、こ

の作品の最後は「まあ、頑固な喫煙者など、所詮はどこへともなく消え去ってしまう運命なのであろう」という一文で締められる。この一文には、歯止めがきかなくなった嫌煙権運動およびそれに影響された世間と、それによって居場所を追いつめられた喫煙者に対するこれ以上ない筒井の憂いが込められている。

ところで、一九九五年一月四日に放送されたドラマ版「最後の喫煙者」では、筒井康隆自身も主人公の喫煙仲間である目下部役として出演している。ドラマの、K・E・K団によつて主人公の家が襲撃される直前のシーンでは、筒井は目下部役として「まったく、言葉狩りの次が、喫煙者狩りだったとは」という台詞を述べている。

筒井の執筆した小説「無人警察^{六九}」が、一九九四年春から使用予定の角川書店出版の高校用の教科書『国語Ⅰ』に掲載された際、日本てんかん協会は、てんかんへの差別を助長する表現が「無人警察」に含まれているとして、一九九三年七月十三日に「無人警察」を教科書から削除するよう角川書店や文部省に求める抗議声明を出した。筒井は「日本てんかん協会に関する覚書^{七〇}」を書いてこれに反論したが、その後も日本てんかん協会からの批判は絶えなかった。筒井はこれに激怒したため、日本てんかん協会および自由に小説が書けない社会的状況や風潮に対して抗議する意味を持つて、一九九三年十月の「笑犬樓よりの眺望^{七一}」にて断筆宣言した。その後、筒井は一九九六年十二月十六日に自主規制を撤廃する覚書を新潮社、文藝春秋、角川書店と結び、同年十二月十九日に執筆の再開を発表した。つまり、断筆していた期間はおおよそ一九九三年十月から一九

九六年十二月の間であり、ドラマ版『最後の喫煙者』の放送日は一九九五年一月四日であるので、筒井は断筆期間中にドラマに出演にしていたことになる。その断筆期間のなかで「まったく、言葉狩りの次が、喫煙者狩りだった」という台詞を筒井が発していたことは、表現や喫煙など、あらゆる自由が追いやられる世間への、筒井本人の抗議の声として裏付けするものとなっている。

また、小説の「最後の喫煙者」では、不自由になっていく世間について次のような描写がある。

「わたしたちはあの悲惨な戦中、戦後を体験してきているが、世の中が豊かになればなるほど、法律や規則がふえ、差別がふえ、不自由になっていく。これはなぜですか」同志はすべて斃れ、たったふたりとなり、ついに国会議事堂の天辺に追いつめられ、ありったけの煙草をふかし続けているとき、日下部さんがおれに訊ねた。「つまりどこ、人間はこういうことが好きなのですか」「そういうことではない」と、おれは答えた。「そういうこと

をやめさせるためには、結局のところ、戦争を起すしかないようですね」

このように筒井は本作を通して、喫煙に限らず不自由になっていく世界について嘆き、この問題を解決するためには抗うしかないと述べている。同様に、本作で「日本人の付和雷同という悪癖が正面に出てきて喫煙者差別が大っぴらになってきた」と述べ、日本人の気質についても批判している。

筒井は、嫌煙権運動という当時の時事問題をテーマにして本作を作り上げたことで、周囲に流されやすい当時の日本人そのものを作品のなかで映し出している。そのように表現することで、読み手である日本人自身に同調圧力の恐怖を自覚させ、個々にとつての不自由に無抵抗のままでは、あらゆる自由が奪われてしまうということを警告しようとしていたのではないか。そして、今もなお同じ問題を抱えている日本人にも、筒井は本作を通じてこのことを同様に訴え続けているのではないだろうか。

月十六日最終閲覧

五 八橋一郎『評伝 筒井康隆』新潮社、一九八五年十二月

六 『時刻表』弘済出版社、一九八七年八月

七 八橋一郎『評伝 筒井康隆』新潮社、一九八五年十二月

八 川村花菱記、山村耕花画（二）『自警團』大正むさしあがみ 大震災印象記 報知新聞社、一九二四年

九 OEMの歯磨剤の専業メーカーのスマカ歯磨株式会社「スマカの歴史」

<https://www.smca.jp/contents/company/history.html>（二〇一九年一月十六日最終閲覧）

- 一 筒井康隆『案外楼よりの眺望』『噂の真相』一九八八年一月（単行本でのタイトルは「早死にしたくないから煙草はやめない」）
- 二 筒井康隆『禁煙談』シガー・ライターズ・クラブ編『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokonakiパブリッシング、二〇〇四年三月
- 三 筒井康隆『最後の喫煙者』が語る―禁煙・アシズムから北のミサイルまで『Voice』二〇一七年十一月
- 四 筒井康隆『特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談』ま、今日も笑って一服。『愛煙家通信 Web 版 喫煙文化研究会』<http://anka.sakurame.jp/articles/004/>（二〇一九年一月十六日最終閲覧）

覧

○ライオン歯科衛生研究所「テレビが呼びかけた『歯をみがこう!』」『うして歯みがきは身近になった』

<https://www.lion-dent.health.or.jp/100years/article/familiar/003.htm> (2019年1月16日最終閲覧)

二 『全怪獣殺人(トモ)』勁文社 一九九〇年三月

三 安田健「トキ年表」近江宏綿 総監修『トキ永遠なる飛翔——野生絶滅から生態・人工増殖までのすべし』ニュートンプレス、二〇〇二年十一月

三三 「日本産最後のトキ死ぬ 佐渡」ギン、推定36歳『朝日新聞』二〇〇三年十月十日、夕刊

三四 近江宏綿「トキ保護センターの16年の記録」近江宏綿 総監修『トキ永遠なる飛翔——野生絶滅から生態・人工増殖までのすべし』ニュートンプレス、二〇〇二年十一月

三五 中川志郎「トキの人工増殖をめざして」近江宏綿 総監修『トキ永遠なる飛翔——野生絶滅から生態・人工増殖までのすべし』ニュートンプレス、二〇〇二年十一月

三六 筒井康隆 特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談 ま、今日も笑って一服……『愛煙家通信 Web版 喫煙文化研究会』<http://aenka.sakurane.jp/articles/004/> (2019年1月16日最終閲覧)

三七 中川志郎「トキの人工増殖をめざして」近江宏綿 総監修『トキ永遠なる飛翔——野生絶滅から生態・人工増殖までのすべし』ニュートンプレス、二〇〇二年十一月

三八 「モクモクツ」『嫌煙パワ』『毎日新聞』一九七七年七月二十日、夕刊

三九 「嫌煙権訴訟」が結審 秋にも判決 反響呼び一定の成果も『朝日新聞』一九八六年三月四日、朝刊

四〇 荒井忠男「嫌煙権運動——押しもどけない流れ」『エコノミスト』一九七八年六月六日

四一 『時刻表』弘済出版社、一九八七年八月

四二 伊佐山芳郎『嫌煙権を考へる』岩波書店、一九八三年一月

四三 「ヘビースモーカーの妻は「高率で肺がん」」嫌煙権訴訟で医学者が証言『朝日新聞』一九八四年十一月十二日、夕刊

四四 伊佐山芳郎「なぜ、嫌煙「権」なのか——加藤雅信教授の運動批判に答える——」『判例タイムズ』一九八五年八月一日

四五 郡司篤光、新堂幸司、平井真雄、穂積忠夫「嫌煙権判決をめぐる」『ジュリスト』一九八七年八月十五日

四六 伊佐山芳郎『嫌煙権訴訟』の実務と市民運動』『判例タイムズ』一九八七年十一月一日

四七 「モクモクツ」『嫌煙パワ』『毎日新聞』一九七七年七月二十日、夕刊

四八 「喫煙規制は世界の潮流」『毎日新聞』一九七七年七月二十日、夕刊

四九 江橋宗「嫌煙」二年に嫌煙権を思ふ『時の法』一九七九年一月三日

五〇 阿部泰隆「喫煙権と嫌煙権☆タバコの規制(下)」『ジュリスト』一九八〇年十一月一日

五一 伊佐山芳郎「人権としての嫌煙権——嫌煙権批判の総括を兼ねて——」『ジュリスト』一九八六年十一月一日

五二 溝澤龍彦「クラー・クラックス・クランその他」『秘密探の手帖』早川書房、一九六六年三月

五三 浜本隆二「クラー・クラックス・クラン——白人至上主義結社KKKの正体」平凡社、二〇一六年十月

五四 伊佐山芳郎『嫌煙権訴訟』の実務と市民運動』『判例タイムズ』一九八七年十一月一日

五五 公益財団法人 健康・体力づくり事業財団「最新たばこ情報統計情報 成人喫煙率(『全国喫煙者率調査』)(2018年1月1日最終更新) <http://www.healthnet.or.jp/tobacco/product/p1090000.html> (2019年1月16日最終閲覧)

五六 郡司篤光、新堂幸司、平井真雄、穂積忠夫「嫌煙権判決をめぐる」『ジュリスト』一九八七年八月十五日

五七 筒井康隆 特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談 ま、今日も笑って一服……『愛煙家通信 Web版 喫煙文化研究会』<http://aenka.sakurane.jp/articles/004/> (2019年1月16日最終閲覧)

五八 筒井康隆「最後の喫煙者」が語る——禁煙ファシズムから北のミサイルまで『Voice』二〇一七年十一月

五九 筒井康隆「笑大機よりの眺望」『噂の真相』一九八五年一月(単行本でのタイトルは「喫煙者差別に一言申す」)

六〇 筒井康隆「笑大機よりの眺望」『噂の真相』一九八五年一月(単行本でのタイトルは「判例タイムズ」一九八五年八月一日)

「喫煙者差別に一言申す」)

四 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

五 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

六 筒井康隆『特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談 ま、今日も笑って一服…』『愛煙家通信 Web 版 喫煙文化研究会』<http://aienka.sakura.ne.jp/articles/004/> (二〇一九年一月十六日最終閲覧)

七 筒井康隆『安大樓よりの眺望』『噂の真相』一九八八年二月(単行本でのタイトルは「早死にしたいから煙草はやめない」)

八 筒井康隆『特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談 ま、今日も笑って一服…』『愛煙家通信 Web 版 喫煙文化研究会』<http://aienka.sakura.ne.jp/articles/004/> (二〇一九年一月十六日最終閲覧)

九 筒井康隆『最後の喫煙者』が語る―禁煙ファシズムから北のミサイルまで『Voice』二〇一七年十一月

一〇 筒井康隆『安大樓よりの眺望』『噂の真相』一九八五年二月(単行本でのタイトルは「喫煙者差別に一言申す」)

一一 筒井康隆『狂気の沙汰も金次第―煙草』『タリフジ』一九七三年三月三日

一二 筒井康隆『最後の喫煙者』が語る―禁煙ファシズムから北のミサイルまで『Voice』二〇一七年十一月

一三 筒井康隆『安大樓よりの眺望』『噂の真相』一九八八年二月(単行本でのタイトルは「早死にしたいから煙草はやめない」)

一四 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

一五 筒井康隆『創作の秘密』から「昨夜の献立」まで 筒井康隆のすべてを知るための50問50答―特集 筒井康隆 虚構の魔術「本の話」二〇〇三年十一月

一六 「嗜好と文化」第32回 筒井康隆さん「好きなことを一生懸命に」『毎日新聞』(二〇一四年一月十三日最終更新) <http://mainichi.jp/sp/shiku/3403.html> (二〇一九年一月十六日最終閲覧)

一七 筒井康隆『狂大樓の逆襲』『噂の真相』二〇〇二年十一月(単行本でのタイトルは

「愚筆・千代田区の歩行者喫煙取締りを糾弾する」)

一八 筒井康隆『特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談 ま、今日も笑って一服…』『愛煙家通信 Web 版 喫煙文化研究会』<http://aienka.sakura.ne.jp/articles/004/> (二〇一九年一月十六日最終閲覧)

一九 筒井康隆『安大樓よりの眺望』『噂の真相』一九八五年二月(単行本でのタイトルは「喫煙者差別に一言申す」)

二〇 筒井康隆『安大樓よりの眺望』『噂の真相』一九八八年二月(単行本でのタイトルは「早死にしたいから煙草はやめない」)

二一 筒井康隆『狂大樓の逆襲』『噂の真相』二〇〇二年十一月(単行本でのタイトルは「愚筆・千代田区の歩行者喫煙取締りを糾弾する」)

二二 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

二三 筒井康隆『特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談 ま、今日も笑って一服…』『愛煙家通信 Web 版 喫煙文化研究会』<http://aienka.sakura.ne.jp/articles/004/> (二〇一九年一月十六日最終閲覧)

二四 筒井康隆『安大樓よりの眺望』『噂の真相』一九八八年二月(単行本でのタイトルは「早死にしたいから煙草はやめない」)

二五 筒井康隆『狂大樓の逆襲』『噂の真相』二〇〇二年十一月(単行本でのタイトルは「愚筆・千代田区の歩行者喫煙取締りを糾弾する」)

二六 筒井康隆『特別インタビュー 筒井康隆の禁煙談 ま、今日も笑って一服…』『愛煙家通信 Web 版 喫煙文化研究会』<http://aienka.sakura.ne.jp/articles/004/> (二〇一九年一月十六日最終閲覧)

二七 筒井康隆『狂大樓の逆襲』『噂の真相』二〇〇二年十一月(単行本でのタイトルは「愚筆・千代田区の歩行者喫煙取締りを糾弾する」)

二八 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

二九 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

三〇 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

三一 筒井康隆『禁煙談 シガー・ライターズ・クラブ編』『喫煙者のユウウツ―煙草をめぐる冒険』Tokaneki パブリッシング、二〇〇四年三月

^{六八} 「喫煙後は45分間エレベーター利用禁止に 受動対策で 奈良・生駒市」『産経ニュース』(二〇一八年三月三十日最終更新)

<https://www.sankei.com/west/news/180330/wst1803300106-n1.html> (二〇一九年一月十六日最終閲覧)

^{六九} 筒井康隆 「無人警察」『科学朝日』一九六五年六月

^{七〇} 筒井康隆 「笑大樓よりの眺望——日本てんかん協会に関する覚書」『噂の真相』一九

九三年九月

^{七一} 筒井康隆 「笑大樓よりの眺望」『噂の真相』一九九三年十月(単行本でのタイトルは「断筆宣言」)